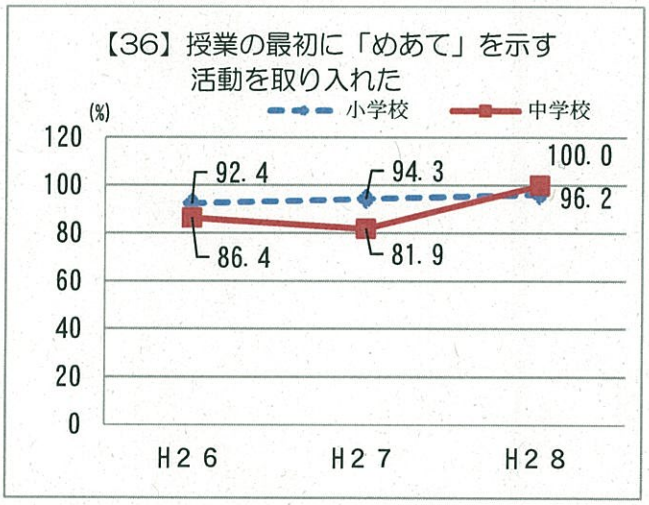
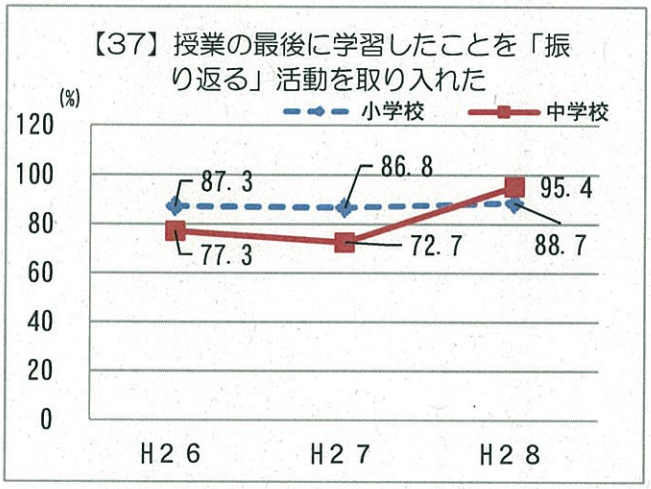
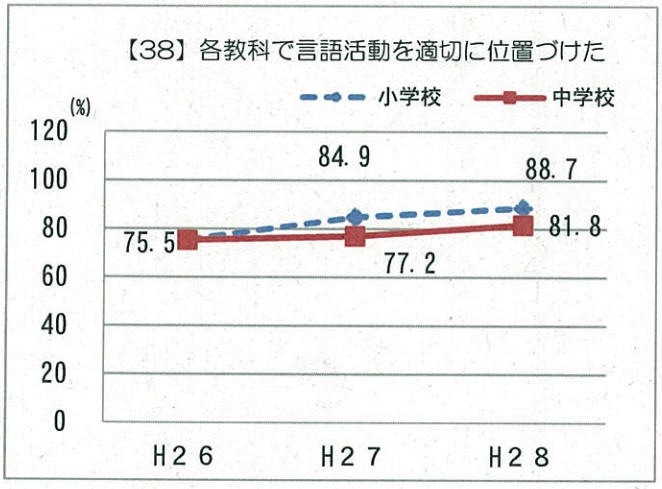
5 学校質問紙調査結果について

指導方法に関する内容







【「めあて」の提示と「振り返る」活動】

授業の最初に「めあて」を示す活動を取り入れた学校の割合は、小学校では昨年度の 94.3%から 96.2%へと 1.9 ポイント上昇しています。中学校では、昨年度の 81.9%から 100%となり大きく 18.1%上昇し、すべての学校が実施しています。このことから「めあて」を示す活動が定着してきたことが分かります。

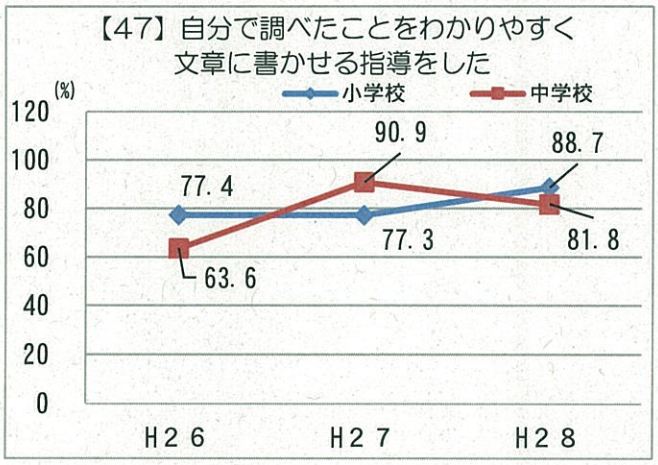
また、授業の最後に学習したことを「振り返る」活動について、小学校で、1.9 ポイント、中学校では 22.7 ポイント上昇しています。

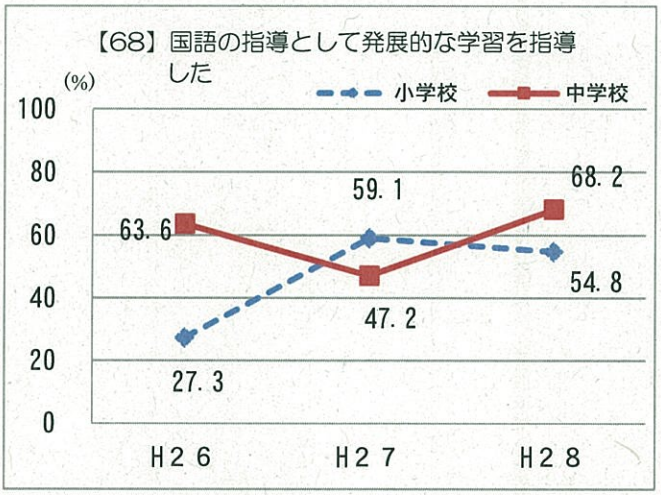
「授業で扱うノートに、学習の目標（めあて・ねらい）を書くように指導した」では、小学校では 94.4%、中学校では 86.3%となっています。

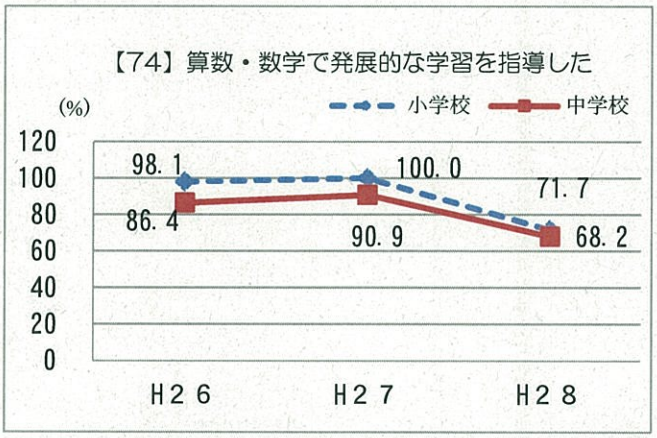
「分かった」「できた」を実感させる授業を行うには、1 時間の授業の「ねらい」に則して、児童生徒が自らの学習を振り返ることができるよう、常にめあてを再認識させたり、キーワードを提示したりするなどの手立てを講じる必要があります。

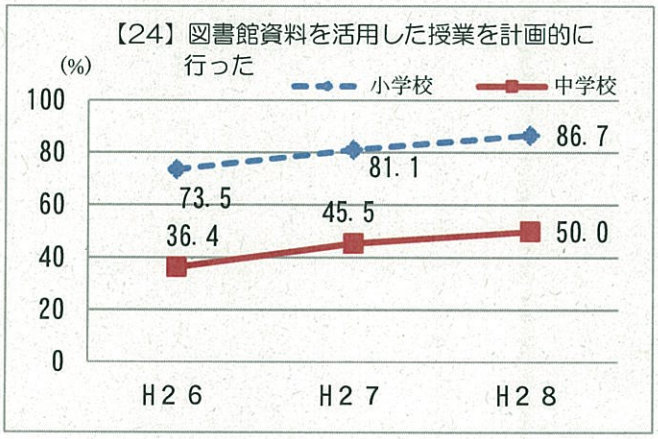
【言語活動を位置づける】

各教科で言語活動を適切に位置づける活動についての学校の割合は、小学校で 88.7%、中学校で 81.8%となり、小中学校とも上昇しています。また、自分で調べたことをわかりやすく文章に書かせる活動については、小学校においては、昨年の 77.3%から 88.7%となり、11.4 ポイント上昇しました。しかしながら、中学校では、90.9%から 81.8%と 9.1 ポイント減少しています。









表現力を高めるには、各教科の特有の用語の確実な定着を図ったり、文章や図などの資料、数式などを含む広い意味での言語を豊かにする教材を取り上げたりするとともに、教育活動全体を通して読書活動を推進する必要があります。

【発展的な学習の指導】

国語の指導として発展的な学習を指導した学校の割合は、小学校では、昨年の59.1%から 54.8%へと 4.3 ポイント減少しました。それに対して、中学校は、昨年 47.2%と減少傾向でしたが、今年度は 68.2%となり、21 ポイント上昇しました。

中学校での国語科の発展的な指導については改善傾向にあると言えます。

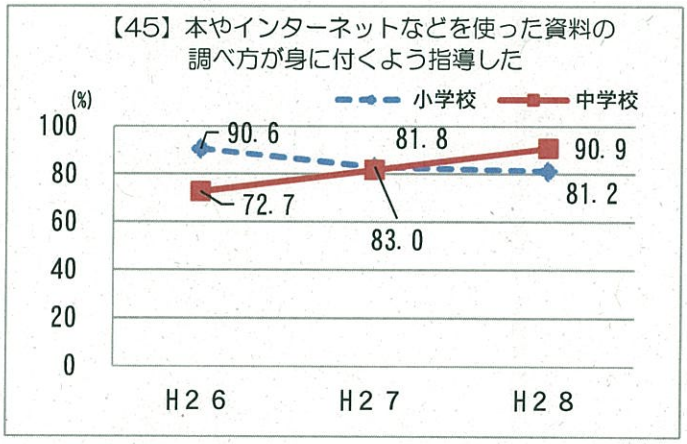
算数・数学の指導として発展的な学習を指導した学校の割合は、平成 28 年度は、小中学校ともに減少傾向にあります。

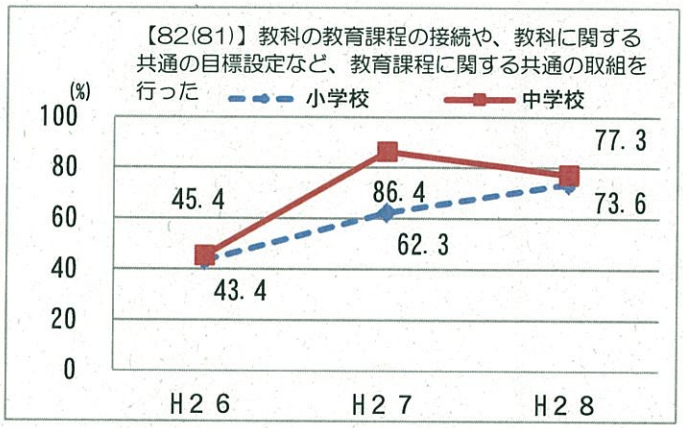
小学校では、昨年度、すべての学校で実施していましたが、今年度は、71.7%となり、28.3 ポイント減少しました。中学校でも昨年度の 90.9%から 68.2%となり、22.7 ポイント減少しました。小中学校ともに今後、発展的な学習をどのように学習に組み入れるかが大きな課題となります。

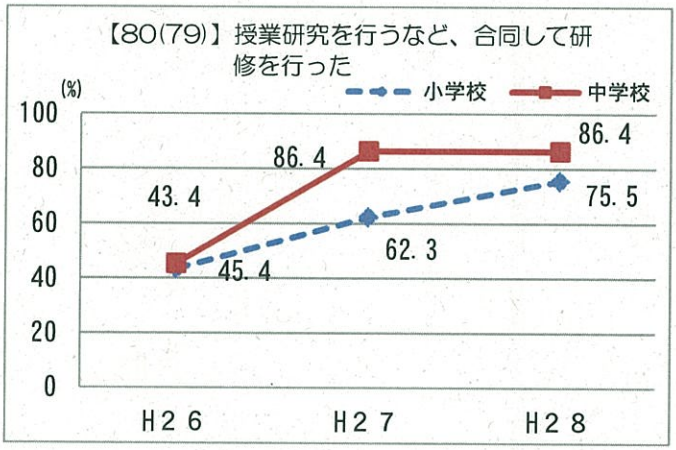
【図書館教育に関する内容】

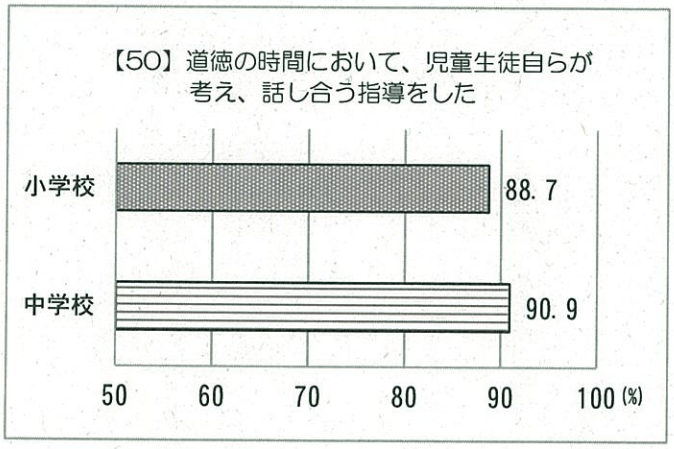
「図書館資料を活用した授業を計画的に行いましたか」では、小学校では昨年度より 5.6 ポイント上昇し 86.7%に、中学校でも 4.5 ポイント上昇して 50.0%になっています。

また、「本やインターネットなどを使った資料の調べ方が身に付くよう指導しましたか」では、小学校では 81.2%、中学









校では 90.9%となり、積極的な指導の取り組みの様子が見うけられます。

図書館を効果的に活用した授業を行うには、教科の学習において図書館を活用した授業プランを計画的に立てることが大切になります。また、図書館を活用した授業においては、学習に必要な資料をどのように調べるのかを具体的に指導する等の手立てを講じる必要があります。

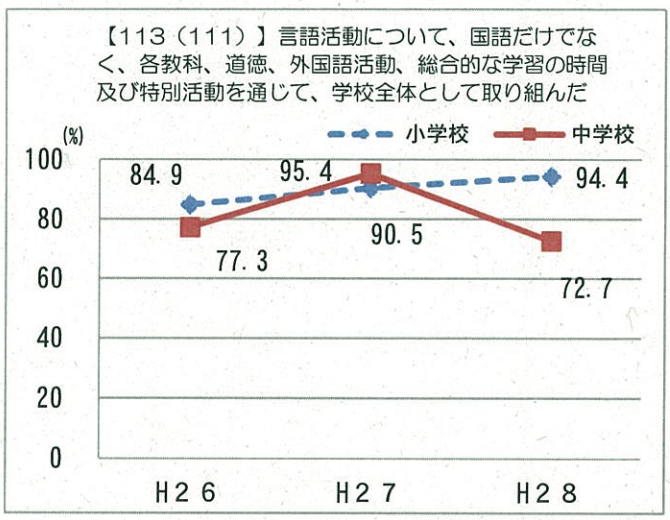
【小中連携に関する内容】

児童生徒質問紙の「教科の教育課程の接続や、教科に関する共通の目標設定など、教育課程に関する共通の取組を行いましたか」では、小学校で 11.3 ポイント上昇し 73.6%に、中学校では、9.1 ポイント減少して 77.3%となっており、「授業研究を行うなど、合同して研修を行いましたか」では、小学校で 75.5%、中学校でも 86.4%と多くの小中学校で、合同して授業研究を行っています。

このことから、小中連携において、その効果を高めるためには、教育課程のスムーズな接続や共通の目標を設定する等、小中一貫した教育課程における共通の取組が必要になります。また、各学校での授業研究等で、小中学校がお互いの授業を参観し合うような合同研修等を通して、互いの取組を理解し合うことが大切です。

【道徳に関する内容】

児童生徒質問紙の「道徳の時間において、児童生徒自らが考え、話し合う指導をしましたか」では、小学校で 88.7%、中学校で 90.9%でした。

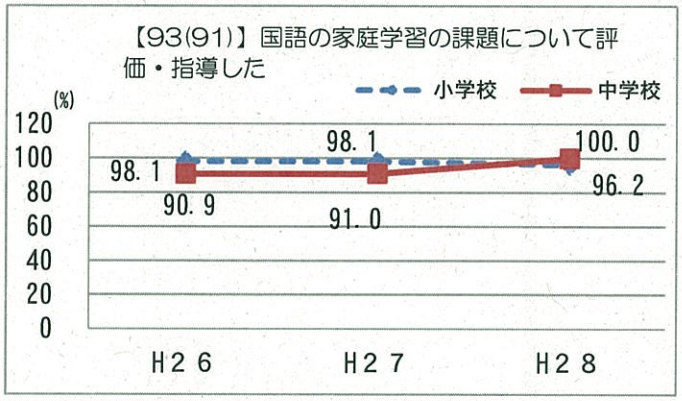


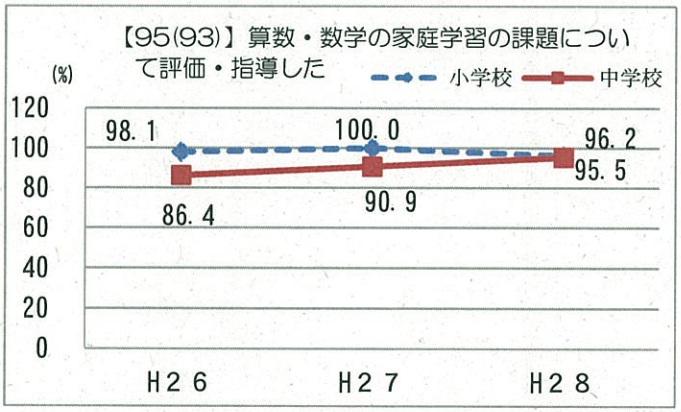
また、「言語活動について、国語科だけでなく、各教科、道徳、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動を通じて、学校全体として取り組んでいますか」では、小学校で94.4%、中学校で72.7%となり、言語活動への取組が見られます。

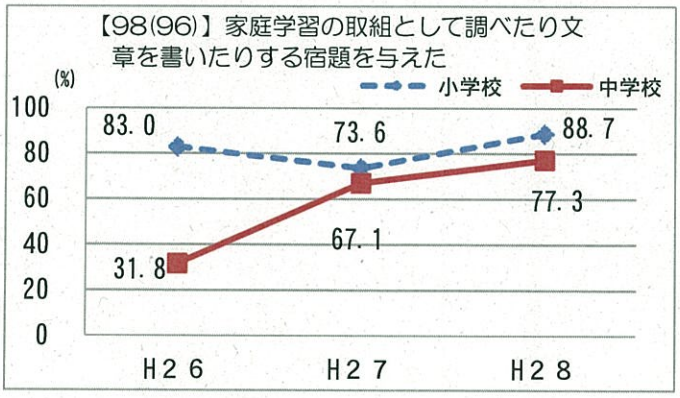
道徳の学習で学んだことを実践につなげていくためには、児童生徒自らが考え、話し合う指導をしていくことが大切になります。

また、言語活動については、国語科はもとより、各教科や道徳等の学習を通じて、学校全体としての取組が必要となります。

家庭学習に関する内容







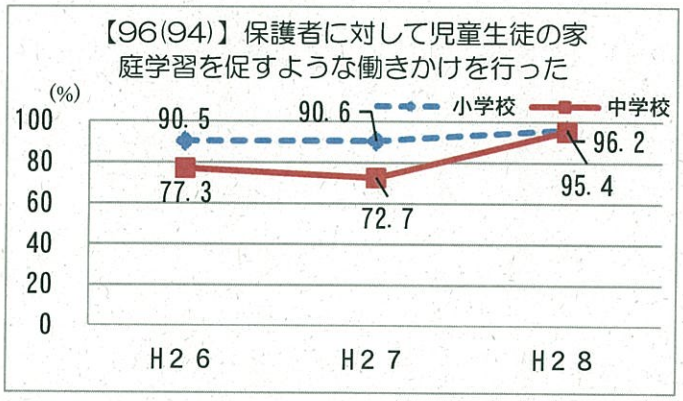
【家庭学習についての取組】

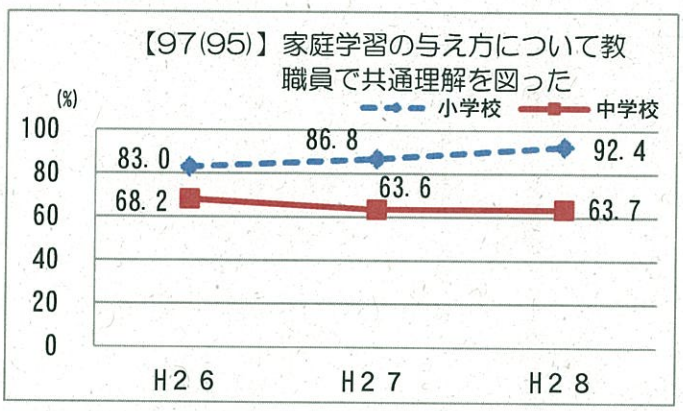
国語や算数・数学における家庭学習の課題について、評価・指導を行った学校の割合は、小中学校とも95%以上を占めており、小学校ではやや減少しているものの、中学校では上昇しています。

また、家庭学習の内容について、「調べたり文章を書いたりする宿題」を与えた学校の割合は、小学校では88.7%、中学校では77.3%と、昨年度と比較して、小中学校ともに 10 ポイント以上の上昇傾向が見られます。

学校が、保護者に対して「児童生徒の家庭学習を促すような働きかけを行ったか」については、小学校では96.2%、中学校では95.4%が実施し、小中学校ともに上昇し、高い割合で実施している状況にあります。

しかし、家庭学習の与え方について教職員で共通理解を図った学校の割合は、小学校では92.4%と上昇し、全国と比較してもやや上回っていますが、中学校では 63.7%と、全国より 5.1 ポイントほど低い状況にあります。



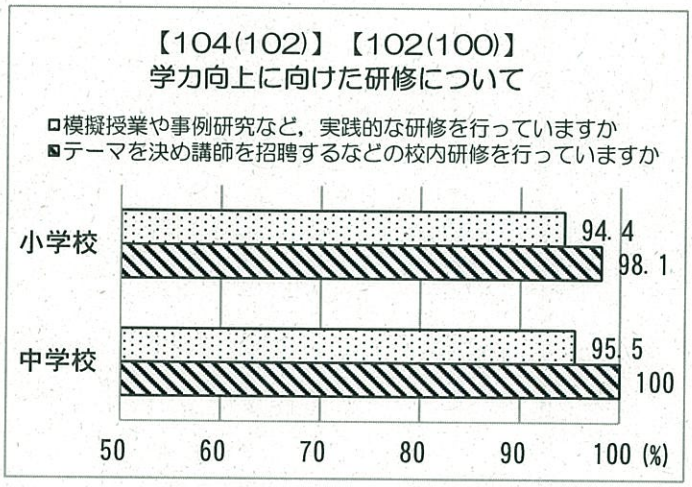


家庭学習においては、授業と連動した宿題（課題）を与え、予習・復習を行うことで知識や技能が定着します。

また、宿題（課題）を次時の授業等で確認・点検・評価・指導するなど、授業でいかしていくことで、「授業が分かりやすくなった」などの成就感や充実感が得られることが期待できます。さらに、児童生徒が本当に追究したいと感じる問題意識を持たせるような授業づくりを目指すことも大切です。

このことを踏まえ、家庭学習習慣の確立に向け、学校全体での共通理解はもちろんのこと、学校と家庭の連携をさらに強化していく必要があります。

校内研修に関する内容



【校内研修についての取組】

校内研修に関する内容で、「模擬授業や授業研究などの実践的な研修を行っているか」では、小学校で94.4%、中学校で95.5%です。その際、専門的な講師を招聘するなどの研修の実施は、小学校で98.1%、中学校100%となっており、各学校がテーマを決めて授業改善の取組を行っていることがうかがえます。

指導計画の作成については、「言語活動に重点を置いた指導計画を作成しているか」では、小学校で92.5%、中学校で95.4%の学校が「作成している」と回答しています。「知識・技能の活用に重点を置いた指導計画の作成」は、小学校で88.7%、中学校で90.9%の割合となっており、昨年度の学力調査結果に基づき、「活用に関する問題」に焦点を当てた授業改善の取組が進められていることがうかがえます。